

月の家

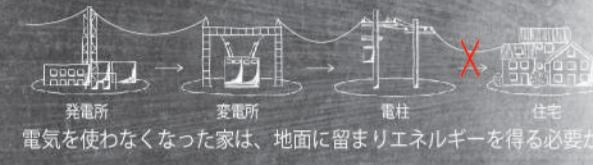
電気を使わないということ=(電力)インフラから脱却し、夜は間に包まるということ

家は、場所から開放され、光を希求し空へと昇る。そんな家は光を宿す“月”となり大地を照らす存在となる。

惑星の公転に合わせて漂う家は、大地の時間から開放され、自ら時間を選び取る。

そんな場所・時間から開放された“月の家”を提案する。

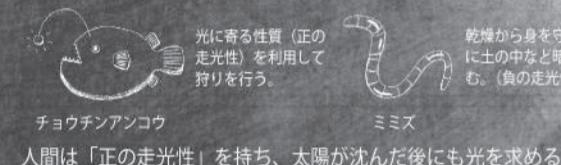
インフラ脱却=場所からの解放



電気を使わなくなった家は、地面に留まりエネルギーを得る必要がなくなる。

X

正の走行性=光の希望



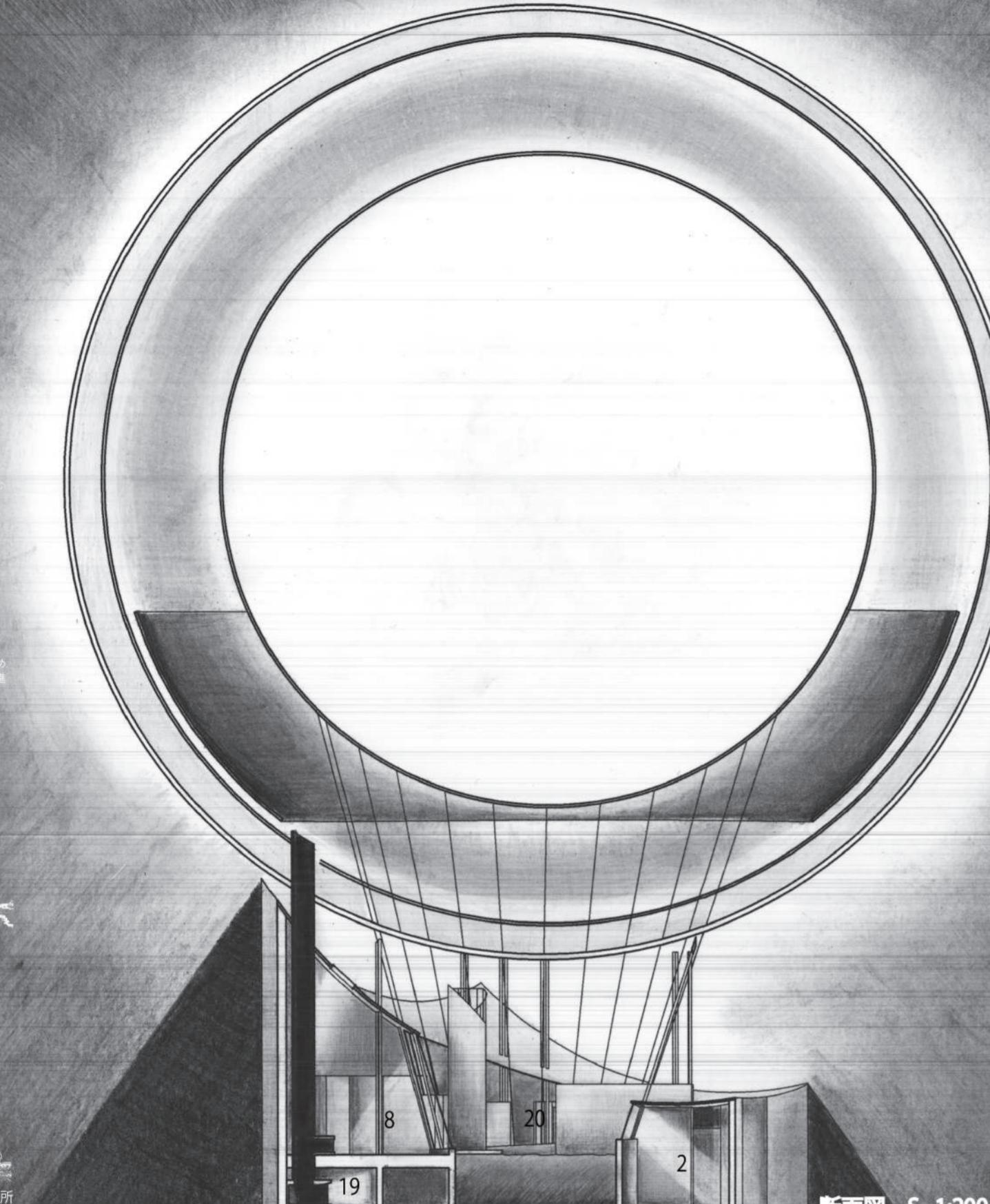
人間は「正の走行性」を持ち、太陽が沈んだ後にも光を求める。

▼

空への浮遊

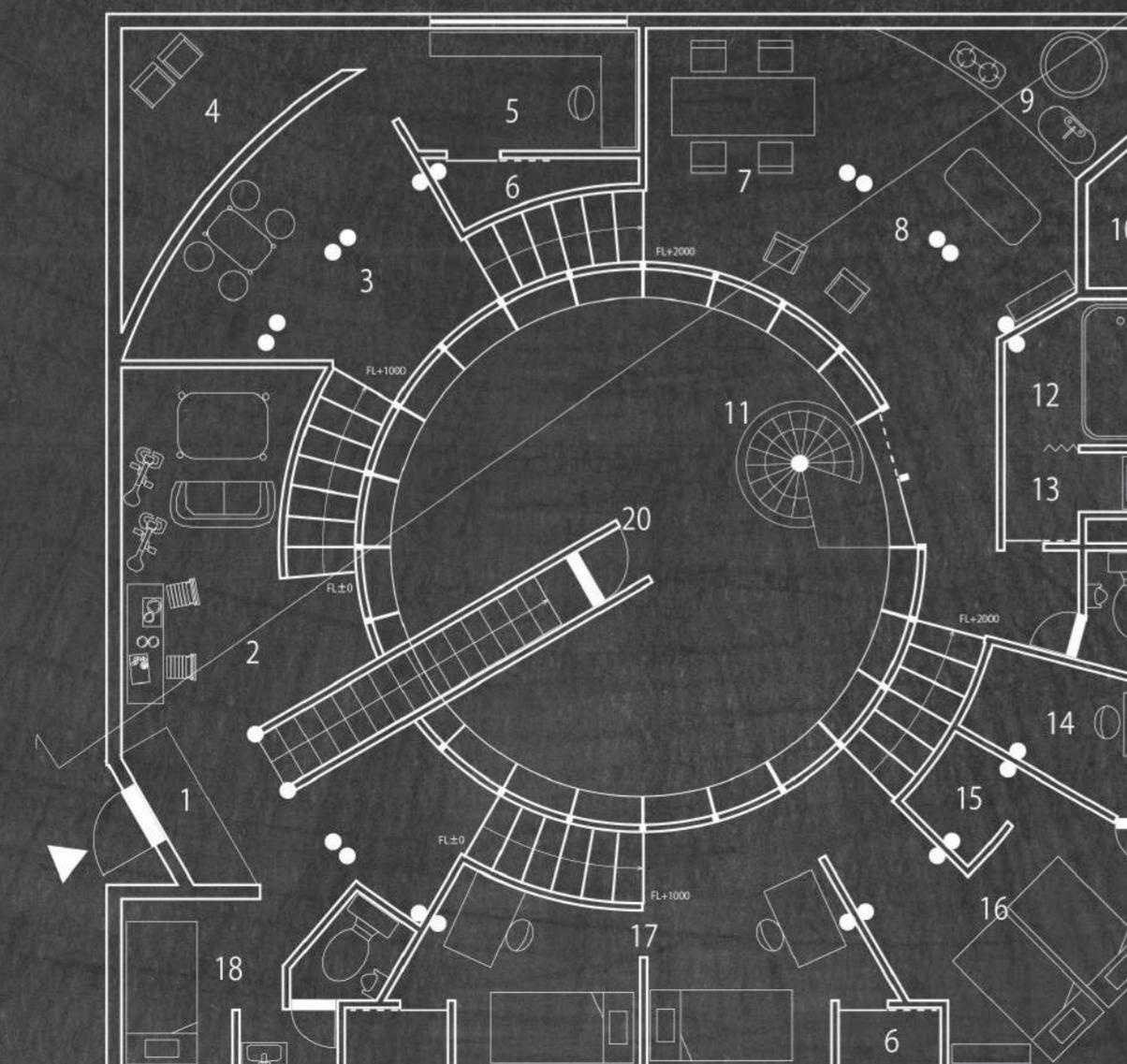


人々は、空へと飛び出し惑星のように浮遊する。そして、自由な場所と時間を得る旅へと出発する。



断面図 S=1:200

- 1. 玄関
- 2. 作業場
- 3. リビング
- 4. 月見室
- 5. 作業室(母)
- 6. クローゼット
- 7. ダイニング
- 8. キッチン
- 9. 釜戸
- 10. 貯水槽
- 11. 螺旋塔
- 12. 浴室
- 13. 脱衣所
- 14. 書斎
- 15. 化粧室
- 16. 寝室
- 17. 子ども部屋
- 18. ゲストルーム
- 19. 燃料室
- 20. 中庭



平面図 S=1:100

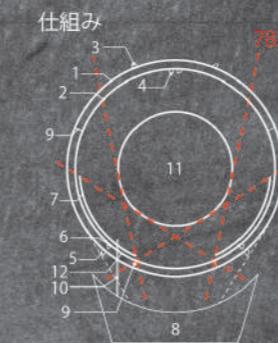
浮遊の仕組み

浮遊方法

この熱気球は、バルーンが二重の膜で構成されている。膜の上部を透明または半透明膜、膜の下部を熱線吸収膜や反射鏡として、温室効果によってバルーン内気体を加熱して浮上する。

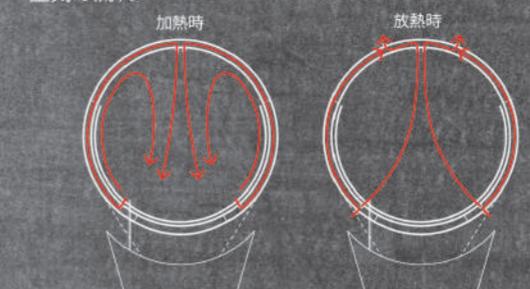
また、日常生活で排出される熱や水蒸気をバルーン内に運ぶ装置を設置する。水蒸気は乾燥空気の6割程度の重さなので浮力増大効果があり、排出される熱と水蒸気は太陽熱が得られない夜間に利用する。

膜の上部と下部に弁を取り付けて内側気体の対流を制御することによって浮力を調節することができる。対流を活発にして内部膜に内側空間の温度分布を均質化することで大きな浮力が得られる。



- 1. 外側膜
- 2. 内側膜
- 3. 外側膜上部空気弁
- 4. 内側膜上部空気弁
- 5. 外側膜下部空気弁
- 6. 内側膜下部空気弁
- 7. 热線吸収膜
- 8. 屋室
- 9. 仕切膜
- 10. 排熱・水蒸気管
- 11. 反射球
- 12. 反射鏡

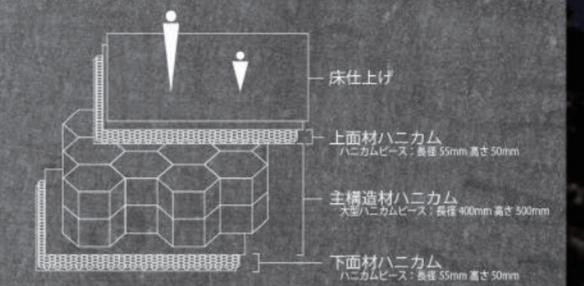
空気の流れ



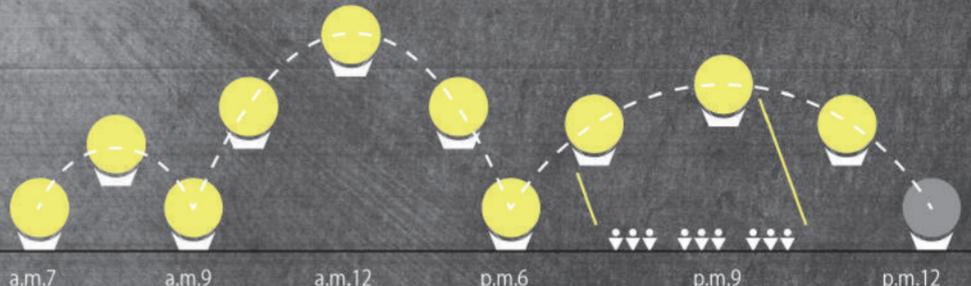
構成素材

建物本体の構造体となるカーボンナノチューブは、炭素繊維のナノマテリアルである。超軽量、高強度、高剛性などの特徴を持ち、空中に浮く建築には最も適しているハニカム形状をベースとした構造にした。このため、住宅の総重量を10分の1に削減することができる。

ハニカムスラブ



生活スタイル



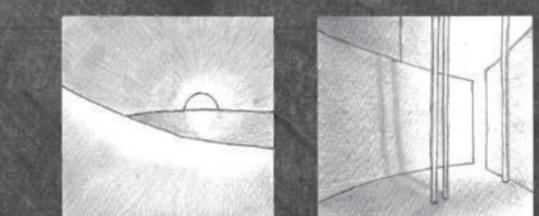
1日の間に何度も好きな場所に離着陸を繰り返し、時間と場所に縛られない生活を実現する。

トップライトから白い光が差し込む。その光の色や質で太陽光だとわかる。朝である。螺旋階段を登り、日光を浴びる。今日はちょうどリビングが南に向いている。

リビングの窓から光が当たっている。強く短い光だ。昼である。キッチンへ向かい、昼食を食べる。

おちょこのふちは赤く光っている。包み込むようなやわらかい光だ。夕である。庭のすすきを眺め、物思いにふける。

トップライトから黄色い光が差し込む。月の光だとわかる。夜である。光の動きを追いかねながら静かに目を閉じた。



ここには夫婦とその子どもたち2人が住む。典型的な核家族である。

この家族は定住しない。そのため、ご近所付き合いや学校のような定まったコミュニティに属さない。

あるときはそこでいて、またいたくなる。

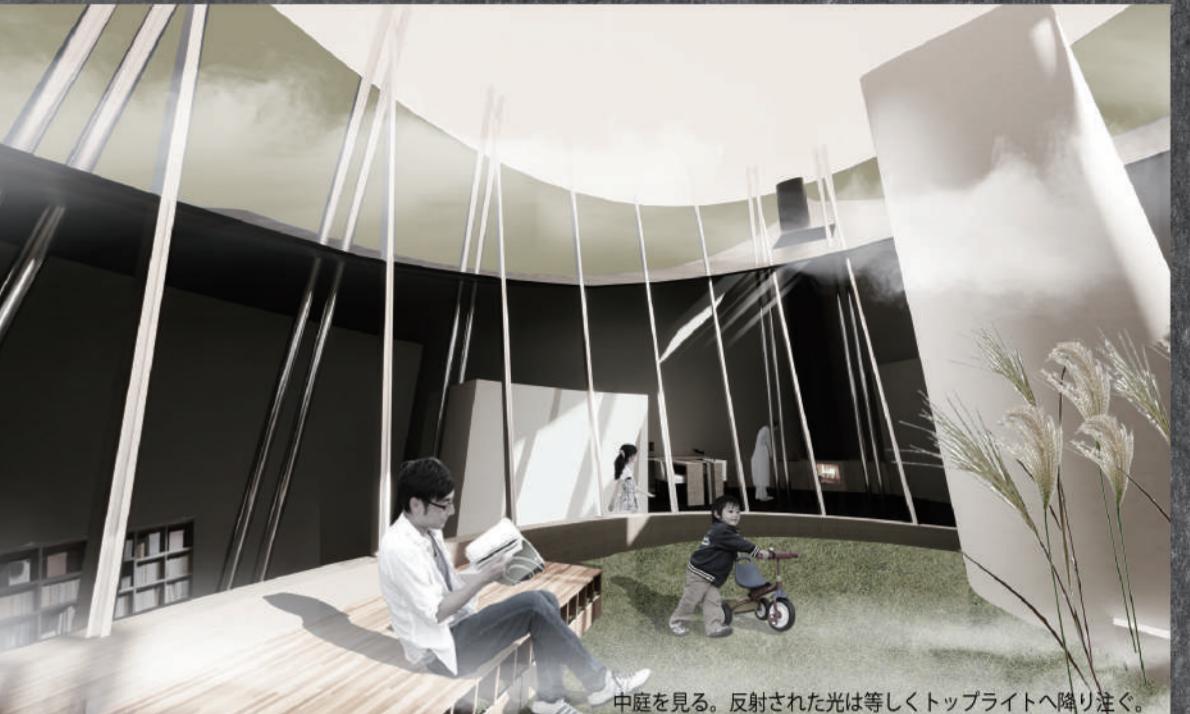
そこにいた人とと共に暮らす、また離れてゆく。

そうして自ら選び取る暮らしは、古くて新しいライフスタイルとなる。



雨水が外側膜を伝い、中庭へと落ちる。気球は、二重の膜で構成されているため、雨水が内部気体に与える影響はない。

- 1. メッキ鋼板
- 2. ウッドデッキ
- 3. ドレン配管
- 4. 改良土
- 5. 防水シート
- 6. 許水槽
- 7. ハニカムスラブ
- 8. コンクリート



中庭を見る。反射された光は等しくトップライトへ降り注ぐ。



暗闇がうら生きる。無数に反射する月たちは地上を照らす。



広場より住宅を見る。黄昏時人々が集う場となる。



水中より、住宅を見る。多様な生物が光を希求する。